

複式簿記という「言語」

－企業活動の整理整頓と文節の仕方－

9月13日

前回、「虹は七色」の例でもって、言葉と世界の解釈について書きました。企業の言語（Business Language）である複式簿記もまたしかりです。

では、ここでの世界つまり「無秩序な連続体」は何でしょうか。答えは、企業の経済活動です。それ自体、言葉がなければ無数にして無限の連続体といえます。

ならば、企業活動という世界を整理整頓するため、その連続体に言葉で切れ目（文節）を入れるとは、具体的にどうすることでしょうか。

答えは、企業の言語である簿記固有の仕訳です。簿記の入門書にでてくる、あの「取引8要素の結合関係」です。これでもって世界（企業活動）を整理整頓しているのです。

そして、その結合の「関係」が、企業の言語の「文法」にほかなりません。では「語彙」は何でしょうか。「勘定」科目です。

こうして、複式簿記は企業活動を認識する言語にほかなりません。それは企業活動という世界を解釈する重要な言語なのです（※注1）。

よくよく考えてみますと、企業活動なる無限体をたった8要素の結合関係でもって説明するとは、まことにすごいことと言わざるをえません。

先の「虹は七色」の例とどこか類似していると思いませんか。ちなみに、簿記の仕訳を五・七・五の「俳句」に喩えられた先生がおられます。まさに卓見で、その見方とも通じます（※注2）。

古来、社会科学（シュンペーター、ゾンバルト）はもとより、自然科学（ケイリーなど多くの数学者）や人文科学（ゲーテ）のさまざまな分野の先人・先達が複式簿記に賞賛の言葉を残しているのも、それゆえにほかなりません（※注3）。

複式簿記を借方・貸方など単に技術的、あるいは煩雑なものとして遠ざけている人たちには、複式簿記の魅力をもっと知ってもらいたいと思います。

手前味噌になって恐縮ですが、『複式簿記のサイエンス』（2011年）は、それを意図した

ものです。

※注

注1) 拙著『複式簿記のサイエンス』53-54 ページでは、言語の規約性の観点から、言語としての複式簿記を説明しています。あわせて複式簿記の「無言の力」という見方を参照してください。

ちなみに I F R S に代表される会計基準の世界統一（統合）は、前回の「虹は七色」の万国共通化といえます。ゆえに、言語のもつ力という点で、そこでの「力」がどのようなものかを考えることが大切です。

注2) 放送大学TV番組「社会のなかの会計」第5回「複式簿記のサイエンスー複式簿記とは何であり、何でありうるか」でゲスト出演された井尻雄士先生のお話のなかでできます。

注3) 詳しくは、『複式簿記のサイエンス』コラム9「複式簿記への賞賛ー複式簿記とは何か」(219 ページ) 参照。